新編女水滸傳

六之巻

へ13
3561
6

へ13
3561
6

稲田大學図書館
昭34.6.3
藏書

新篇女水滸傳巻之六

浪速　好花堂主人野亭著

第十一回

主臣飲ニ娼楼ニ探ル逆徒動静ヲ
賊軍決ス策ヲ致ス天兵敗績ヲ

話説古今人情無更頼翻手作雲覆手雨と賊せし如くさしも乃
五剣山の寨も熊人が反忠より一夕の烟と効つる木枯秀蘭の女雄
名誉小十五六人まで山を下つて備前路ふ渡アて楢摩小たぐるを室
に著て春雨が方に至を有し顛末を語りもて春雨ハ一驚此上ハ
如何るべきと商議まりくなるふ秀蘭ハ曰ク賊ハ身の立所ハ記
ま我々が大義を鎌倉ふ訴へ出てなふれば此上ハ伊賀ふゆきて

人々と俱に嬰城に逃れ籠り上せんの外道なし況んや衆女此義に
同じ二三人克潛て平多城に入れば春雨も俱に思へ家内併
當して以て入城せんと約をなす專嚴なん旦說関の清次八
義清病氣平癒の後如何もして接女と繼納へ動靜を探り聞
に接女は投身て旅舟に助られて行方を不知文を矢に中て死
亡し由なれば左に右を失ひ義清は報じなば義清道芝又
一層の怨を增さん共如何もせんと只茫然たる或
日清次街に出て人の說話を聞に後兎五劍山は多年山客の寨にて人
は往来せざる深山なれ共山中に火起りて鈎声聞ゆ人は
を清次家に歸て命ぜ以謂芦葦多き所に方今に不知第一彼五劍山に
有へも可知と不知行て動靜を候へ入と仕度に決し速に論ず来

ず義清に行て苦りて山義清も得て行んと申せば清次制して曰臣
一人向ひて賣買足り實否を糺せ上又て計策を廻らせ帰て旅
裝を整て啓行し日うべて備前岡山を主に不計高天五郎と
逢る五郎は大きに恐懼て避走んと法を乞て引檜笠を
れ我を陷さり敎手に行方を求て今日宿志を達せ
人を紀方へ提げ白刃を抜て斬んと五郎大きに悲て曰臣主家の大
任を過て以来何卒芦葦に行方を尋ね捉搦て再度論来せん年
月を苦と嘗て今を據を得ん共を註進せんと言
来り吉を聞て清次不番怪急手を降し不得終に又を納て
曰汝誠に如此なれば我と俱に步行し五郎を引て来て義清に
報じられて義清大きに悅び子細を按問に及ぶ曰小臣過日の罪

謝せんし偏く渚刀を跋渉し芦無等が栖を尋ふ幸らく遽に五
剱山に隠慝を聞出し假小渠に屬し動静を候ふ魁首剛慶云
山僧多くの賊を總司て專ら揀兵に雖も此以又伊賀の平を
入道是に与して逆意を逞しく小臣剛慶名ゞ伊賀に行しと幸ひ山
寨に火を放く賊ゞ手臂を分ち此上八舊主に訴へ軍勢を催し伊賀
に押寄て過日の恥辱を雪んし仍兵へ多く塗て清次に面會致せ
し云小義清主臣小躍して喜悦尚尋問に五郎又曰南境皇の長ゞ
娘春雨八剛慶に寵妾して往来の武士と女色を湯し堂を立
ひく時に仮延に集り高議をひく支ちく清次示ひ捷まと笛
を吹出し五郎に見せて曰汝是を見知や高官藝視て曰数珠八不存
敵ゞも笛八我堂に有ゆる号笛と捷子に剛慶に持かと清次是

と聞く大に怒り賊法師君氣の餞我父母乃怨敵なり我誓て生
なゞら渠に肉を食ハざんば如何と多日に熱腸を沃ぐ軍神乃
金血を飛し太刀を抜く五郎を斬へく高宮大さに叫ぐ曰我如汝
大功を建るに拒我を害せんとする八女何成故ぞ清次呵々と笑ひ國賊
何ぞ愚昧なる我主臣汝が乃小産國を放き清次に漂泊し或八
妻を失ひ兒を殺しも皆是汝ゞ乃為なると思へ汝主家の大仇を過
てあるに猶に猶に猶を屈め俱に暴逆を助しゞ天誅不免我力下に
臨くなゞら尚去を翻して生命を全ふせんとする糸未絲至極の老城
なり早く泉下に餓鬼し成く大示落小墮却ゆし義清道芦すも
刀を持て一分なりし斬殺し此上八室に行春雨を擒刀し美否を糾し
計策を廻らんと両士西国武ふ形を仕て日あらく春日が宅小

櫻女若狭
遇夫兄

尋ね探せども詐言を似絵くに夜の宴を聚むる妓女ら
なべて諸しく樓小倩が盃盤を陳く絃奇に文媚を敵に探女若
萩が奥を副へて出来るに思ひげざる丈夫が心欲充既に言を
憂せんとして義清清次が駭然きるが目を驚く制しさあらぬ辞
を舞踏とかくれを接女早く甚意を悟く箏を調べれば
若萩扇を採て奉るに義清清次殆に粤に入し辞をなして
酒を喫し更深に及べば花車を呼盃盤を納さを扱若萩接女を国
中に誘へとこれを花車曰此両女は如何成權門にも寝席の勧を
ちらに余の嫖子を定めるべくに清次曰我情欲の為に渠を招く小
うに京師の名妓なれば故郷の人支小せん科をを曲く寛とし
筒流しの白銀を寸詩折に賜りまで花車夜面小娟と合こ接女若

萩に向て曰顧老が宜に主の千前に謂て人徹暁詩話し
顧君を慰めるべし勧む原来接女若萩が頼に所なきに唯々
強に社に自余の嫖子名は義清が殊色に見に生只管若萩接女
と義欣に引袖引細言に樓を降る義清清次霄は秋人の
猜人支を恐に佯く高声小唱語に怪しまるに接小討に更深人
定に四人首を攢に別に某の憂苦を語て合に無に又の會合を相
慶る清次接女に向に主春雨に支亦に向に接女に素に人に絲
芸若萩が平常の説話に肉に如く本枯秀蘭禪月等が動静別慶
が支に并語に若萩が持に号笛を出に清治に渡に人に枝
八高宮が自有的に遠に賊主の堂に鞠に主を傳に子
細に孔内に身を起に樓を下に接女若萩袖に声を

低しく曰寡人処理なれば主婦を無双の勇力有郷小菖城山猪
と撲殺しく人皆賽巴しく捕らる程の膂力の婦人今もなほ易々とへ
縛を不受き上我を再生の恩を捨て主婦又有恕て妾を両人より多
客辱めと受させば我を貞操を全さる支偏小主女か高情まされ
ば何卒一命を宿しく泪しく涕を憑へれむ清次怒を賞も如何杯
春雨が勇ハ畏ぶ、は不足し雖ども再世の恩義を酬ふるも義
者の不好所なると渠を引向さば支明白なる上ハ籌を廻しく賊法師
及苦系多を虐とな一多年妖孽を散ずべしと救時賽話一夫明
小起出れば婦女を荻も送別を名しく一人の了髪を抜く俱小春雨
が宅を走出殺町を行ゆきは袂袖を牽く何処迄送るべきと
や別を告て帰るべしと云を桜女伴く曰妾ハ主の宿を降くこの

殿の国へ行なれば吾兄ハ実しく帰る歟しく云小未ハ不審なれば是
拒るべ春雨は行と告る小春雨是を聞く怪しむと雖ども
も身平を城小行く支を思小折れざさく驚ば専く平田城
へ行辨厳を行し家の邪移親家の者小託しく身ハ大和国逸小
支をしく故郷を去く伊賀へ行て却説清次ハ義清侍女荻
支をしく曰道芝に有く條を結開を然し文を支に再會を喜る清次義
清云ハ賊無平多城に守を付ども我を両人が力に及難し伝聞ま公兄
豎綱居城しく支を訪へ援師を乞人しく云られば義清曰今日迄義に
有ばしく兄弟名ぶ世ざる鎌倉君の恩を惇ばば之然る今更侍頼ハ
如何と猶予を清次曰不然今天下に患難を除く世騒乱を鎮んしく旦
進昌に恥を雪の時を待ば何の憚る処多道と義清を勧て身も従ひ

備前に於て盛綱が命令に従と通じ給へ即刻盛綱両人を召出
兄弟の情を延て願て処を用たに駿を是国家の大事なり捨置
難し軍勢五百人小宇田太郎秀信右方大王丸剛勇に帰る之
騎を義清に付副別に弓馬甲冑等を義清清次に与へ深く
恩を謝し欣然として備前より上程を盛綱急使を以て近江の鎌倉
に注進し乞て右幕下終に朝参して大小名を召て商議ある重
忠曰平田の小城小賊徒守る何程の夏侍に命じ義清逐臣に託し
て攻し盛綱が兵を借て向て上に彼国人及伊勢近江の諸将に號令を
傳へ義清が後距を要し平定に帰し言上ある鎌倉殿是
に同じ早馬を発て伊賀国大佐々木冠者及びの佐々木義秀
小後距を遣て告て言に於て佐々木源三義秀大に怒り義清が

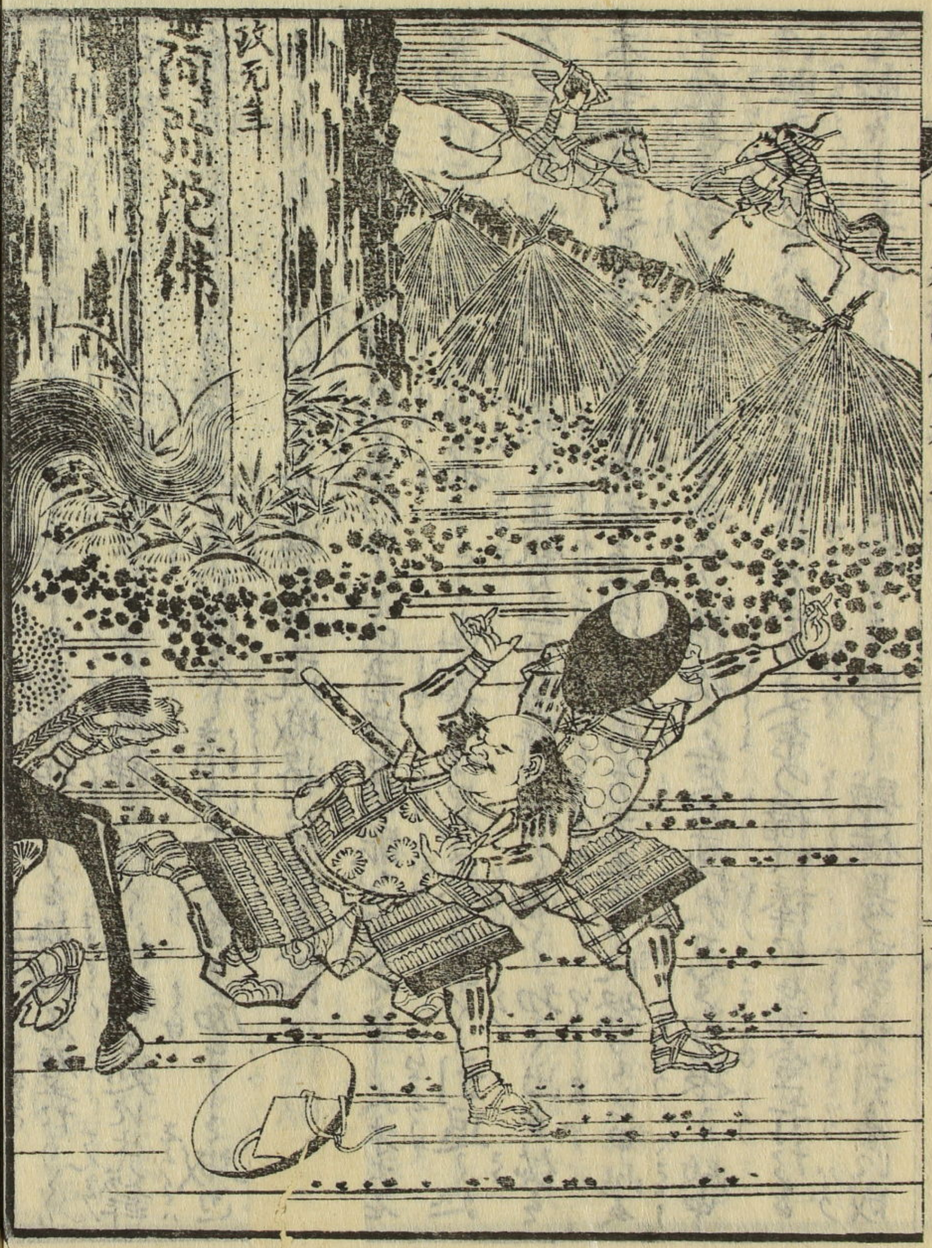
勅令に従て救免の時に而に未し国中軍戦の備に専に意小伊賀国大
佐々木冠者惟行小西国大内冠者が代官に此国に居住する鎌
倉の令を深く同国乃敵を他小討る法や有と手勢五百騎を率
し義清が着せる前に平左城小押寄小城中に徒是を聞て商議
し途中に向て戦に云者あれど城小引寄て代に以者有て群議
区区なり秀蘭階を進て出て曰大佐々木小無保の暗和何程の夏
に妻等に任て諸和抗を高て安臥と泰然として驍
色なく幸成忠に云小秀蘭が奇策有と知て許諾に秀蘭別館
に軍議を為て先春雨禅月小二百の兵を授け計を云含れで両婦
唯に出行次に玉園詩呂に二百の兵を司に是亦奇謀を授て
埋伏に心を身小木拓夕虹弥生と俱小三百人を従て城外一里小出て

此比程なく翌日大佐々木兵士五百人を二隊に押寄せ自身馬を陣頭に躍り出て曰く逆徒久く源家の高恩を蒙りながら謙倉小拒敵支火中に投夏虫と叫び劔戟首に陰さざる前小亮を脱ぎ降を乞べしと呼るふ夕虹弥生名僧さ風車の大言哉と士卒を下知く矢を放ち得物を以て撃て攻惟行敵の小勢なるを侮て輕々一突よつさ出せと白麾振て指揮を為げ敢死の若者共楯を捨て撃て攻る夕虹弥生逆に戦ふ支須臾にして馬を返して敗北を大佐々木は兵士勝ふ奮て追程に一箇の茂林有処迫詰を為て聲に鼓則て思ひ思ひ林中に春雨禅月敵将を待受久て二百の兵卒大佐々木を横合より撃て攻惟行駭き騒ぎ伏兵有と兵を二隊として討取と下知を怕処今迫明を走り走て秀蘭が兵陣を正して返し戦ふ官兵途を失て討る者数を知ず惟行怒て自身太刀を接ぎ賊徒五六騎切て落し戰ふ所に秀蘭羽扇を上て麾けば禅月笛を用て佯て敵を血路より大佐々木が兵を誘り散々に逃て惟行は引行勢小誘き七八丁を追て処に亦面ふ金鼓震ひ起て王園彭侯二百騎を奥鼎小陣を敗将首を渡せて呼る戰労て官兵後信の敵小関憧し我先と走て戰ふ勢いかるる惟行安て奥に思ひ血刀振て切て回る王園一箭を引て兵を放つよ不過惟行眉間小射抜られて馬より真逆さまに堕て王園駐て首を無難獲切て主将如行を失ば残卒何ぞ保つ曳き皆散々に落行ぶて秀蘭十二分の勝利を得大佐々木が首を揚て大喊三度上て城中へ引返れば幸盛始諸将大きに切を崇て盛小宴を開諸士乃労を祝ぎ引る妻に佐々木義清は関清次宇田

太郎右方大王の車を引奪し猛勇九兵士五百余騎を率ゐて伊賀う
着陣す此時佐々木義秀九国中を尽く集め手勢一千余騎馳加る程
に義清清次多く以て義秀小拜詣し別後の情を尋ぬ義秀清
次が誠忠を感じ〻動函赦免し急ぎ城攻ふらんと義秀曰完徒謀略の者有り進退能法に合ひ
既に大佐々木冠者討ち取敢て軽急進む勿れ備を為せ兵
を三隊に別ち一陣小佐々木義清関清次右方大王手勢五百余騎二
陣小中里左郎祐頼辛田右郎秀信各同じく五百余騎三陣八源義
秀自身麾下の勢五百余騎勇威凛々たり辛田が城の三方を三峯
に攻つめんと押寄不如而已伊賀伊勢の國士勢を集て出張し大佐々木が
残兵も一千ばかり成ぬる者共八波多三郎大井兵清山内滝口三郎

齋院次官親能等の都合千騎勢千五百騎如何なる鉄城石壁たりとも
踏碎勢なりとも共賊徒小しも不屈静へに待詰る処に先鋒
義清八多年のうち懐を此一挙に開んと清次大王を励まし城辺
近く押寄喊を作り攻進む此手城将八甲斐八郎信濃弥司
前之兵衛尉天野鬼多丹なんどの者共前眼を見合せ大木大石
を切り矢を放つ夏雨の如し〻さしも押寄手是を恐れ少し引退く処
を甲斐以下城門を開く其勢三百余騎どっと喊く切て出る佐々
木勢豆亜を立て弁東西小乱立関清次右方大王大きに怒り三甲斐
なる紀吾三郎いざ賜を覧ぜんと清次八三尺五寸大刀を手振き敵中
に馳入忽ち七八騎を切て落し大王と丈余の揃え棒に節金打たる
を軽々と手振き人馬をなき倒し彷徨賊徒是小驚き引退て成

禪門力戰擊
敵兵


政元手
河内住佛

処を得たるまゝ進めし義清ゞ指揮ふ寄手色を直し攻進むれども
天野乃軍安くゝぬ哀ふ思ひ浮物を打振く近付敵を切く落し味
方を励す血戦を清次い勝ふ素く黄精神加る前を無果の剛ふ
渡り合戦ひ七合なくゝ切く落し續く鬼藤内は斬くゝ鬼
多内虎貫の勢力をなく鉄鞭を打振く向へ戦ふ双方劣らぬ豪傑なれ
戦ひ五十余合にゝく未雌雄を決せぬ哀秘術を尽くいづゝ合ゞが
終ふ鬼多内清次ゞ打大分ひ鬼の真甲を割き眼暗くなりぬと
つゝ難なく討取る芳奈思ひの外敵に喰崩る人今更引返さ
ば分ふせんと死力を極く戦も敵の男壮當ゞ十分雑議
なる処城中ゝ是を見弟五郎兵衛忠実平左衛門を開く新
手勢三百騎許り出芳奈を助く戦ふゞ賊軍ゞ力を潜く備

を立直し再度官軍を追崩ひ佐々木源三是を見く大きに怒り麾下の
新兵五百余騎ゞ喊く義清ゞ兵に入替り城兵と揉合ゝ何時可終
もなく人ゞ疲り此時又搦手に中里太郎宇田太郎斎陵次官親能な
人ゞ数千二百余騎を三隊とす攻ふ城兵木石を投ゞ防ぎ
ば寄手死亡の者多く無左右も近付不得城中ゝも迂手の軍雑議な
きば固く守く討て不出中里宇田の軍公勇敢にも共可為方なく只
矢戦ふ移時く城中謀師冨田進士秀蘭考ふ城楼ゝ上く戦闘の酔を
見ふ迂手ゞ兵戦ひ労るゞ引丸支不能寄手大軍の上搦手ゞ勢
過手進手に男ゞ引上く此ゞ城中ゝ新兵ゞ出く敵を
攻敵ゞ春雨禅月都ゞ手ゞ景徒の男女兵士三百人を領く馳ゞ
味方を助く立帰義清ゞ何奈芳奈を討く敵ゞ陣太刀を抜く切

間もなく芦葉に行合名乗合く切結ぶ芦葉は西國を横行せし賊師なれども敢勇乃ぶ者なく之上馬上の達者なれば左右に乗用しく戦ひ程なくその義清切まくらを軽傷二箇所を負けり危き処へ右方の大王獅子荒ひ如く駆来る節金棒を揚芦葉が乗たる馬を喝し撃ち馬は是に驚き芦葉は落しく敵陣に駆入きを芦葉堪馬しながら地上に起尚義清を討んとし大王八五郎を扶く芦葉に撃くら応信濃の節司遠目に是を見く急ぎ駆来り芦葉を助く多く西箇戦を文一か大王一棒に信法の節司と撃殺し尚芦葉が頸を陸ぎ撃ちけし不芦葉早く身を避しが過く右手を切く撃をひるむ処義清得を又馬も死り押へ言まで乗ぶ如斯く双方尚一歩も不退戦し金鳥西没し鐘声暮す報れで退鼓を鳴し文綱を引きもけり

第十二回

義秀迴智虚斷水路城外
長源施功德返神鏡禁軍下

話説城内小人今日戦小四個乃主将を撃せ上多く兵士陣没しなれば幸盛大きに怒り明日自ら出戦せんとひしく秀蘭諫て妄敵軍の挑撥を見ず小大依を木が比敗ひしば不如堅く城守日を積んで敵兵を労せし月不遠しく敵軍退屈を時我軍一斉に突出し謀を定く登撃ん勢小多く江辺へ攻ひ小人安心ん小畠田進士是も同じ俱小称りれで幸盛ル怒ると初げ専ら防禦の辨嚴をせん官兵ハ今日の戦小士卒を多く撃きぬまで賊徒乃猛將四箇を討れれで富く悦び明るを待兼新兵を引き退手搦手一斉小吶喊を発て攻登

ほ城兵矢石を充て防ぎさへ敢て討て出されど寄手死亡の者多く
しく仕出し打ち支へ打ち支へ幾日か経り遂に日々押寄れ共兇徒能防ぎ
て官軍死傷の者は多くなられど殆ど退屈し英氣くじけ軟く攻め兵
氣勢ひなるとる佐く木義秀熟慮て斎院次官と南識しけるに賊
徒味方は英氣に懼を敢て討て不出ハ味方は退屈を待不虞に夜襲な
どとゆく若徒の利を計らかなべし此身ハ當國ほ居住なれど城中は地形を
知る故に兵糧水の絡は矢石の道あるべしと同親能曰當城ハ四方
水の絡ゆへ見を為ふ為を固めて而已也と弟に然るを否親し
不視ぶ事を知侍べし義秀首を頃て今夜計る旨ゆへて清治大
王等を招き箇様と計を示さで両人深く軍兵三百人を率て暗夜潜ほ
搦手に回り城ほ七ヶ所を焼て地中を穿て支へ平所ほ及ぶ深き支へ大石に

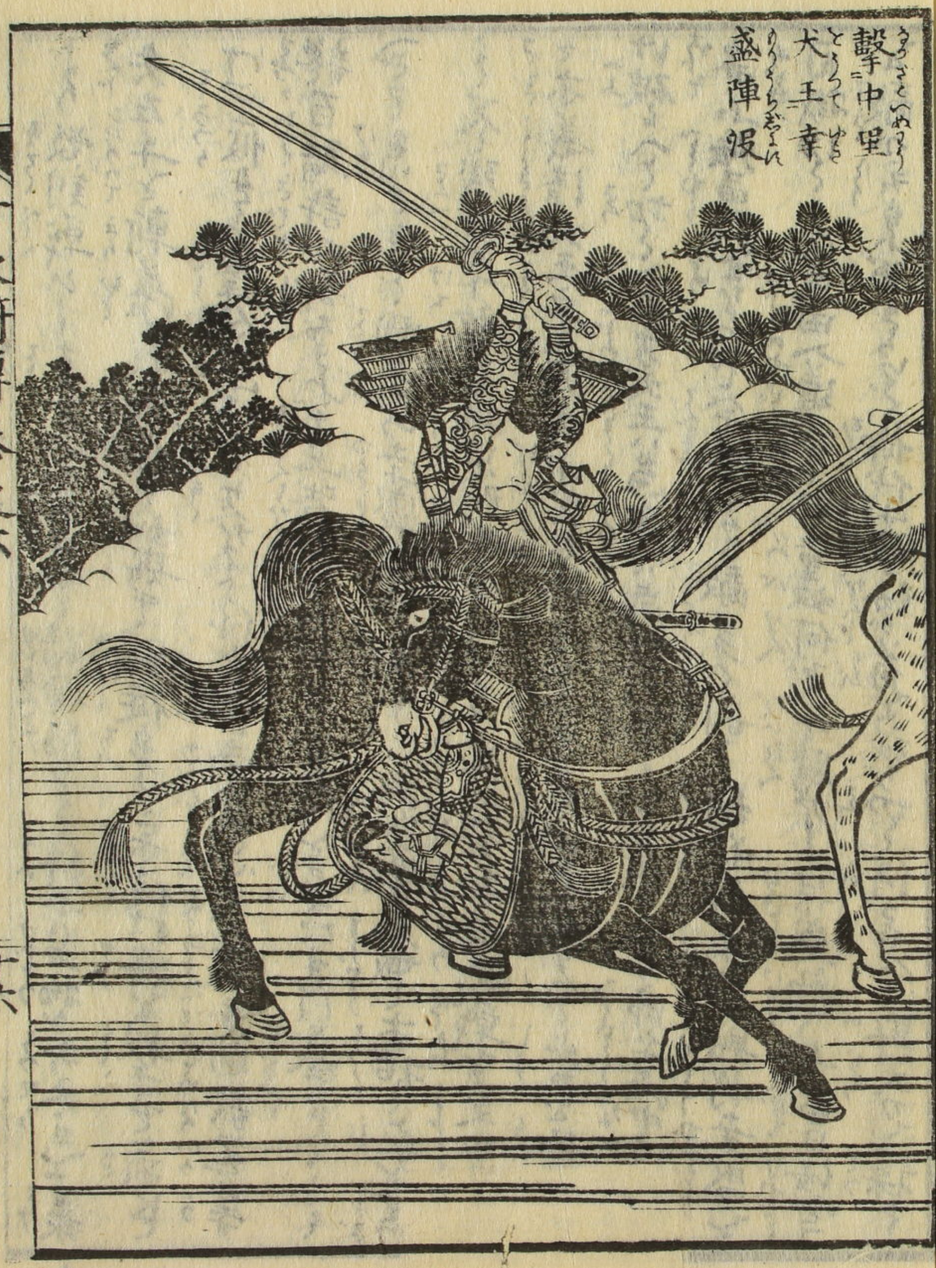
しく三箇の筧を堀得ると清次大王等是を堀捨て大石を以て塞を
ち義秀ほ斯と報ぐ為ハ太きに怒ほ深く切を裂と従是遠巻して退
手搦手英氣を養ひ賊徒の打て出るを待情を為如く城中ハ暴ほ
ふの絡絶て既ほ乾渇ほ及ん氏幸盛秀蘭等を紀平田入道ほ絡の有
所を地を求て人道看を敷て曰當城ハ別て水に乏しく敵を堀て
水の湧所を地なく後面の山中ち筧之節を水を通せほ俄ほ絶た
ぜ今更施に為を計を為べと等を秀蘭嘆て曰敵將味方は強さまろう
が況を知ぬ時を多く自然に變を待なん今ハ空く渇て死を人ら
我堂を一致て討て出て敵を拉挫ほ再度西国ほ向を計策を廻し
なんと云ほ衆將是に同て新ほ一直を為く英氣を盛ん異黎明よ
り退手乃門を開て討て出る者共ハ平田入道上総忠光司馬太郎脇谷

天平太高田進士禅月春雨龍岡なんど萬夫不當の者共主將次郎冠者
幸盛を圍繞しくこと勢七百余騎勝員を一挙に決せんと勇威凛々し
く城を出秀南小木枯を助け久虹弥生なる残兵三百人を以て搦手を防
ぎ合戦摸様に依て生死を決せんとぞ笑ひける官兵早く敵の出ふを
見て備へを立て出張り此前大内冠者惟義大依々木ら雙言を報ぜん
千兵五百騎を以て義秀が軍に馳加る大寧小戴も大内が同宗なれば松浦
監物宿根圖書を以て三百余人大内が侍師と共に當着しを官
兵都合四千騎に向ふと義秀伴し搦手八勢七百騎を以て巻
き寄せ残る大勢を四隊に別て戰をまむ幸盛が先駆禅月春雨冨田進士司
馬太郎多馬を踊らし陣頭に出て天兵に先登大内惟義大依々木が雙を
傳さんと八百余騎一同に打て禅月ら例乃鉄禅杖を振て振騎

馬步卒に差別なく打て倒て程に官兵多勝を消し道を開て通る
春雨玉圓大力を横へ敵を切支丹冨田進士司馬太郎多馬も婦女子劣
らじと秘術を尽して戰ふ官兵大内勢陣列を乱て敗走
す大内惟義大に怒て敵左祖の見る前で後なる者を迎せ先
下知なれば松浦監物も諸勢を勵て陣を立直さんとせれ共城兵冨田
に懼て散々に乱騒ぐ二陣に距し五郎義清岡清次右方大三宅田太郎
此者共一千騎ばかり馳出大内に力を副る中に小弓清治猛秀旗力を奮ひ人に
ぶくと打て働く小不討る春雨に名を奪ひ打戰に清次公に春雨を扶て
思へども源無双乃力者なれば力を交ること十合に及ぶ清次大に怒て賽巴と
稱せられし程に小感じ力を捨てつと組んで春雨に得手を取て大に投捨
て多子と組雙方絶世に勇者なれば両馬が合にぶと落上を下へと揉合しが

春雨右手を手ぐり突折終ふ清次生虜りて清次無命し後陣ふ送り
せ馬ふ乗系怒ふ岡田進士馳来て敵を引なく声々ふく撃ちふ清次こそ
くーやとて向へ戦ふ吉又三十合進士いでう敵を色ふ終ふ猛越ふ腸を切割れ
て首をとふ是を始めとく大玉八司馬太郎を討とる義清九多く敵をうば
官兵勝ふまく馳立ふ素盛是を見て天神の荒ぶる如く丑郎兵清忠光平
大八道多を左右ふ従へ突出しく切く回ふ程ふ官吾又員色になると佐々木義
秀中里太郎千余騎馳来たく助の戦八賊徒剛勇なると雖ども国ふ命る
大勢ふ馳向ぶてちを爰ーに別く血戦を此時齋院次官龍口三郎多高
義ーく猶手へ軍使をはーー急ふ攻ちらせを身八七百余騎を率しく敵の後
ふ出急る城を乗ーんとく秀苗八夕虹ふ生木枯と倶ふ退手猶手ふ別き陽
御示を宮に於くこ箇所ふ喊叫声天を動ーー地ふ震ひく殿ーー幸盛八思

ひの外敵強気で所詮討死く心を決し忠光平田多ーー一隊となると軍中を縦
横ーーく人を斬支草なぐが如くかれで屍八畳々とく岡を分ーー鮮血八俥ち
とく流れを変に宿根圖書八敵兵の剛なるふ恐を敢く前へ進ま
ず東西ふ迯田を軍を見居きちて禅月八鉄杖を根く敵を撃支救ち
らば馳田アーが圖書を見く能敵とを思ひ人馬を躍らーく撃てらば
圖書駭然急ふ走人とくるを織ーく返と馬を乗ーく退分鉄杖をを延
後ーーう忽ちく撃八圖書八頸胴ふ分てく失ふる松浦監物逆ふ是を
見く馳来て大力振を切くふ禅月荒糸と父ひ走ひく敵られで尼
ど泉下ふ奴くーー得させんと朱塗を如く血ふ染る鉄杖を揚く監物ふ
つくふ監物是と戦を合へ数十合にく既ふ危く見ーー処清次恩人
松浦を撃せーく馳来く禅月ふ撃とーーふ禅月両士を対手ふ戦ひーーが今朝



擊中里犬王幸盛陣没

ころ数刻戦ひしに支なれども力なく精神弱くして終に監物が太刀と兼
ねて左手を斬落され戦死せり如斯て賊徒多く宗徒の將を撃ち氣を
けづられて降人出る者少なく僅に今い幸盛忠光平田玉園等
の諸百騎許の討ちあるを上皆数箇所の重傷を負たまひ墓々しくも
(ごとき)勇ましきを剛氣の幸盛氣を奮ひ一路を開き入城し木枯と死を潔
うして残兵を十知く城内へ引返せ後より一隊の勢馳来り戦を交ひ是佐
を本義清大王早田太郎中里太郎等忠光竜園玉園等の死力を極めか
け破らんと切く入右方大王は当年十歳の若冠なれども佐々木が郎等中に三を
幸ふ強者なれば今暁に敵多く討て猶精神不屈賊將幸盛を
同様切くるに平田入道呼曰童奴何で斗膽なる宗盛卿の貴田日佐如き
を敵かれ給ふ者なるぞ御代ふ所佐が首を捨ぬ切く降ぬと野太刀を振く

切くるに入道もとより者なるぞ是は是と奥皮三四十余及ぶ大王の貴勇
を難く太刀節をとろふ見るまぢは幸盛見事く太刀抜ぎ大王ふ切くるに中
里太郎は駐来て幸盛ふ向ふ幸盛大きに怒て大刀を揚く太郎と戦ふ内
大王は難かく入道を討取同く幸盛を引捜ぎ討ん入ぬ幸盛些に不驚二
雄を對手に戦ひが如何しん大力なれども折散を大王得そと棒を揚く
喝て撃に幸盛是を避返て棒を奪く横さまふ大王を撃大王速く馬を躍
らし身を慎むまで鬼をもろく中里ふ横腹を強撃金剛力ふて何でも
堪へず馬より倒ふ落く失なる大王は大刀を抜く切くるを幸盛又棒を上
て是を承流し隙を見く大王が鬼の真甲を撃ふ徳ひ遠く肩骨を砕る
許撃なるを是さしの大王馬上ふて不得落る処を又一棒を降せば鮮血を吐
て死亡せり且又関清次は如何かしく城主を撃取又母孝養に供へを尋

雷く怒に来るとかの一隊目立幸盛形装を見て是ぞ賊山僧なるべしと馬を先
しく馳り鞭を引なと呼く血に染なる大力を振て撃てくる所幸盛怒を棒
元延て是を戦に及ぶ間を見合せ清次なるべし清次驚き出身ハ
宗若殿なるべきと問幸盛曰然ると清次又曰然ば指図三草山にて二親を
害せしは身かろか幸盛曰又我三夫婦無益に諫言して自殺せるを仍て我剣
を下して苦痛を救ひ給へと乞愚時なるべし諫死せ忠魂に免し我首
を御に与へ切れと頼朝に賞を得んと棒を捨て立なを清次白ち
身既老父母に忠誠を尽すべし何を此を改て降人に不出手我又鎌倉殿を甲
冠て公に得道成就を計るべし幸盛呵々と大笑して紀良を呼て
き死を惜むものなれば何で頼朝に宿を頼む所き無多れ兵士我乃に忠死
を我何を生を貪る良を早前れと鎧の上帯とき短刀を膝に突立て

文字に切て首差伸さる有様ハ勇を布るに引き清次已良を不得首
を取て高声に鬼神と呼て二郎冠者幸盛を討得たりと呼ばれ
此処彼処に残る賊徒差遣て死を有降人に出て有ける忠光玉園
に是に今ハ是迄と自ら剣に伏を官兵勇を悦ひ陸奥平左城に馳向
此時城中に尚矢種を盡て防ぎけれ寄手政ぐる故源蔵
義秀に戦ひを義清名に任て自身城に至て指揮せ処流矢に
節を身に請て重傷かれを引退て義清清次名幸盛及成
将の首級を切先に貫き馳来ぎ金を兵嬉しさに手疵を忘れ俱に城
辺に引返て城中に幸盛始諸陳亡と聞今ハ是迄也と既に火を放て自
殺すと雖も今迄十重廿重に取巻て敵軍遠く引て屯と報じけ
れば木拓始皆々不審思に処に一個の老僧城四近く歩て高声に

俊盛坊長源城中へ十支有門を開き呼ばり叫び斯し報じ来て秀蘭
苦しみに通じ難しと云ふ聞き入て益小門を開きて長源を城に通しけ
きこと木枯秀蘭夕虹弥生列を正しく上座に請し木枯長源に向て曰大徳
何乃為に来りて者長源曰貪道伊勢に有て平左右逆を以何卒
利害を説き降を勧めに未だ早入道始泉徒の軍陳亡を終ふ女
将名を称を不捲しに嬰城し悪な紀男女を屠を殺さんと仏弟
身を見ず不忍押て後羅刹場に来り願くは降を乞て兵士が命を
全りしを乞て念珠を繰て教示し木枯曰佐佛の慈善能心其人
に雖も如何ぞ主将幸盛始左祖乃将士屍を戦場に晒し首を梟木り
辱らしめ為る我軍今吏生を貪て世人何の面有て合んぞ依て城を
拠て兆を潔せんに願く大徳衆軍の命を助へと乞を長源押返し

て曰宜く処理を為ん仏法を以て今刃を伏し武を絶て維道の怨鬼と化んより
城を開き諸士と倶に命を全し髪を剃て一佛乗の法を修し一門乃霊魂
を安養浄土に導む是増々る退福可有と説さんに木枯秀蘭
感涙を流し多年の悪念翻て長なる黒髪切拂ひ内待所を長源に
附属し永く長源の徒弟に支を乞む俊盛坊歓喜踊躍して急ぎ城を
出て斬て義秀に達し此時義秀乃矢疵傷て重を今八死を向を共降を
詩諾遠て兆を引き城兵多酒臭を浴る分地に八方へ散を
義清城中に入て城を請れで長源八木枯秀蘭夕虹弥生の四人を神鏡
を守護し先鎌倉に赴る扨も伊賀に賊徒亡失一國平定しれで諸将領
国へ凱帰ら佐々木義秀八館山の城に入て後三日に死去る齢七十
三歳なりとぞ滅ぶ源氏累代忠臣終に一命を忠戦乃為に養を国家

涙を止る斗り也増て雪れ谷義清者ハ悲歎限りもなけれ共数さくなしざれば
屍を取平て葬り首を切れ所の賊徒の首を塩に浸して鎌倉に馳登りて重
忠に附て始末を言上し鎌倉殿感じ給ひ逆臣を赦免有て主臣とも
加禄を下し玉ふ長源の内侍所を呈して四女が罪を申宥ければ頼朝将
神鏡を押いただき此多年宮中にハ此宝鏡を多年尋奉りしに計ち入渠等
が所持したるを偏に貴僧的の働に依てなれど渠等宝鏡破却せられて
んを無難我手に入る事国家長久王統盤石の基なれバ其功に免じ
四女が一命を長源に与へ帰し玉ひ有かたけ後盛法師恩を謝して退きける
因て清次も重忠に従ひて春雨を乞奉りて是よりて清次が戦功の
抜群なるに愛して春雨をも貰ひて長源が徒弟たらしむ又役賊
徒の首共ハ由井が濱に渡して梟木にかけられ事又全く納りて後頼朝

御佐々木義秀が戦死を深く歎き玉ひ伊賀國山田の御小新大佛寺を
建立ある是義秀が追善とぞ聞えし則寺中に義秀が墳墓を建備
前安藝周防伯耆出雲因幡日向右七ヶ國より義秀が追福佛事の嚫
として各一荘を注襯せらる又本堂の梁の西に佐々木源三為菩提大檀
那源二位頼朝奉行佐々木四郎左衛門高綱とぞ彫付なりける玄裡より伽
藍成就しければ開眼師後盛坊長源并子僧及五人の尼を請て數百部
の經を誦し開眼供養嚴重に行ひければ香客七貴賤感涙を流して唱
仰されば義清清治等ハ多年の愁眉を開き櫻女道光を迎へその御
館山居城より義清又清太郎が死を悔みて新大佛寺に地蔵堂を建立
して是清太郎が追福のためとぞ清次夫婦深く恩を謝し益忠勤を勵て
いまぞ義清重く用ひ国家柱礎の臣とし主臣能相扶て子孫連綿とし

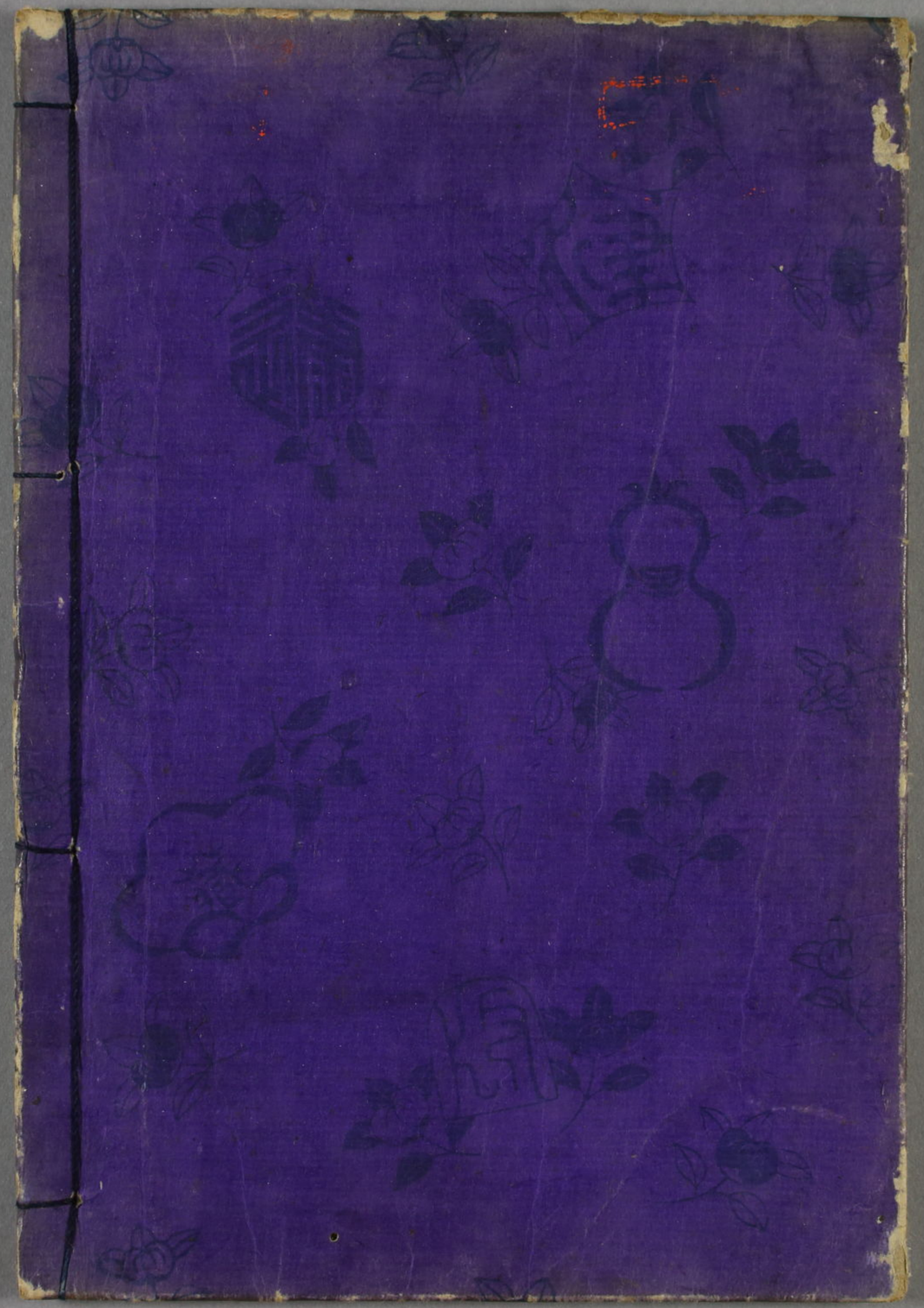
栄る栩も長源ゑ徒弟五人の尼ハそゑ後根岡兵庫築嶋寺に草菴を結ひ朝暮讀経〳〵一門乃後世を吊ふ事ハ播州室津なる春雨ゑ親家の人〳〵長ゑ亭宅及家什を賣拂ひ築島寺ゑ菴小施襯ゑ仍て五人乃女僧一門退福の外ハ他ゑ交なく行ひ清し皆耳順の齢を保ちゑ大往生をとげるとぞ

新篇女水滸傳巻六大尾

篇者　浪花　好花堂野亭

画工　尾陽　東南西北雲

彫刻　浪花　山崎庄九郎

○繪本蔵版目次　皇都書林　三條街　吉野屋仁兵衛

繪本平泉實記　前後十二冊
霊狐奇談　繪本雙忠録　十冊
義久軍談　鎌倉太平記　前後十二冊
茶店墨江草紙　九冊
寒燈夜話　小栗外傳　自初編至三編　十八冊
繪本頭勇録　十冊
繪本金花談　十二冊
自來也説話　前後　十一冊
同　彦山霊驗記　十冊
相馬將門　總獲僧語　自初編至三編　十五冊
同　金毘羅神霊記　十冊
則定仁勇傳　八冊
同　箱根霊應傳　六冊
安信仲店　輪廻物語　五冊
同　義勇傳　六冊
小野篁一代記　八十嶋影　十冊
同　孝感傳　十冊
延蛍少女玉取草紙　七冊